

レクラム文庫 第一号本
「ファウスト」初版の表紙

私の一冊の本

志賀英雄

朝日新聞が日曜版に「本と雑誌」というページを設けて、「一冊の本」と題する読物を連載しているのを、人々は知っていられるであらう。それは昭和三十六年一月一日に、論説委員である森恭三氏が執筆したA・シーグフリードの「アメリカ成年期に達す」を第一回として、学者、評論家、作家その外各界の有名人名人によって書かれた興味深い読書随筆であって、十月二十日号に載った伊藤舞氏の、松崎天民著「記者懺悔・人間秘話」をもつて一三八回になる。

自分では所謂珍本漁りをするような書物の虫ではないが、かなりの愛書家だと思っており、人間性の形成において支配的であるような「古典」について語ることも、教室における学問上の仕事の一つであると考えている私なので、平素から学者や知識人たちの「読書遍歴」や「書齋訪問記」などを好んで読む。そういうわけで私は朝

日新聞のこの「一冊の本」なども、第一回目から今日に至るまで毎号深い関心をもつて読み、教えられるところも多く、その切り抜きも数十枚にのぼっており、それらについては教室においても屢々語ってきた。

この「一冊の本」というのは、もとは三十四年度の朝日新聞社の入社試験の作文課題であって、主幹の笠信太郎氏の出題であったが、のち読書随筆のテーマに採用されたもので、その課題の受け取り方は、筆者によって一貫しているとは言えない。そのことは今までに一三八人の人々が、所謂私の一冊の本としてその書名を挙げていたものうち、例えば清水幾太郎博士の「猿飛佐助」(第四回)を始め、唐木順三氏の「正法眼蔵」(第二一回)や、宇野弘藏博士の「マルクスの資本論」(第一三二回)そしてその次回に石川満士

があげた稀覯本であるホイットマンの「草の葉」の初版本（一八五五年）などがあるのを見ても明らかであろう。そして現在までのところ同一の書物が重複したのは、「論語」のほか僅かに三冊に過ぎない、と言うことも、この課題の理解の仕方の違いに関係があるろう。

わが国の出版文化の最高水準を示してきた岩波書店が、三十六年七月に二七〇〇余点におよぶ岩波文庫の中から、青少年の必読の古典として、「一〇〇冊の本」を十五人の学者や評論家の選によって発表した。その選者の顔ぶれが、所謂岩波好みに偏しているために、当然挙げられるべき古典的名著の幾つかを逸し、また選択を誤ったと思う点もあるが、とにかくそこに掲げられた一〇〇冊の本は、まさに豪華な書物の饗宴だといつていい。私もまた青年期から、この饗宴のメニューの中の三分の二以上は、岩波文庫によらないものもあるが、味わってきた。ところが桶谷繁雄教授は、この古典の饗宴にたいして異議を唱えて、「これはいわゆる岩波という名から連想される教養主義の悪しき一面を示すものといえる。若い人はこんな百冊の本など、まず読まなくても少しも差支えない」と言って、これを「ティのいい書物文化におけるお子様ランチに過ぎない。」（読売新聞、三六年九月四日）と決めつけている。掲げられた百冊の本の中には、私もまたそのように思うものがないではない。しかし桶谷教授の批評は妥当ではない。多少の異論はあっても、とにかくこの「一〇〇冊の本」は、殊に大学教育をうけずに教養を高めようとする青年にとっては、いずれも必読の本であることに疑いない。ところで高名な十五人の先生たちが慎重に選んだこの岩波の「一〇〇冊の本」と、今日までに一三八人の著名な人々によって選ばれ

た朝日新聞の「一冊の本」とを較べてみると、そこかなりの相違があつて、両者に共通したものは、今までのところ「論語」を始め、ルソーの「懺悔録」や、スタンダールの「赤と黒」それに漱石の「吾輩は猫である」など、本当に僅かであるのに驚かされる。つまり著名な学者、評論家たちが、感銘をうけ、自分の人間性の形成に決定的な意味をもったと語る一冊の本が、青少年に必読を薦める「一〇〇冊の本」の中には、意外に少ないと言ふことなのである。

そうすると桶谷教授の「こんな一〇〇冊の本など読まなくてよい。」という言葉が正しいのか、と言う疑いもでてくるだろう。しかし巨大な古典の大森林の中から、この一冊の本と呼びうるような書物を選びだす、と言うことは、確かにその当人の人間性をかけてのことであつて、甚だ困難なことであり、また極めて主體的であり、個人的であることは避けられない。けれども百人が選んだ一〇〇冊の本が、一冊も重複しないと言うことは、少なくとも古典の世界においてはありえないだろう。「古典」とは、その価値が普遍的に妥当する書物に冠せられた呼称であるからだ。

それでは私の一冊の本とは何か、この場合私はこの、一冊の本の意味を、私の人間性や思想や世界観を改造して今日のごとくあらしめ、将来もなお私の一切を支配し続けてゆく真理の脈脈が、その中に限りなく埋蔵されていると考える古典として、終生手離すことはない書物の謂に解する。したがつてこの一冊の本は、私の思索と体験の痕跡をも、それによつて明らかにできる一種の精神の履歴書とも言われるべき書物であるべきである。そのような書物を、私は実は二冊もっている。一冊は「新約聖書」であり、他はゲーテの「フ

「ファウスト」である。しかし「新約聖書」は、地上に属する真理の書物ではない。それは私の一冊の本として語るには、余り崇高な万冊の本の帝王として本の世界に君臨し、万人のための一冊の本と呼ばれるべきものである。したがって私はここではあえて聖書を、私の一冊の本としては取り扱わない。そうすると私の一冊の本は、ゲーテの「ファウスト」と言うことになる。ゲーテの「ファウスト」は、現在では「教育学の唯一の天才」と呼ばれたベスタロッチと共に、私の研究の重要なテーマとなっており、教育哲学特講の時間に、教室において幾度か講義してきた「ファウスト論」も「パイディア」を初め二、三の学術雑誌に、十篇ほど発表してきたので、ここでは「ファウスト」そのものについては、詳しくのべることはない。

私が初めてゲーテの「ファウスト」を手にしたのは、同志社中学の五年生になる頃、富山房の縮刷本で出た森鷗外訳の翻訳によってであった。その頃漸く哲学への思索のようなものに自覚めかけていた私ではあったが、「ファウスト」は全く難解であって、恰も前人の未踏の深い思想の大森林のように静まり返っていた。それだけにまた私はこの「ファウスト」を手にして、急に思想的に成長したような一種の自己陶醉のようなものを感じた。一世紀に一人、あるいはそれ以上の天才と言われたゲーテが、六十年という人間一人の生涯にも当るほどの長い年月をかけ、比類なく高いオリュンピアの自覚における思索と体験の一切を、その中に投げこんで完成した「ファウスト」の中には、人間性を支配する殆どすべてのロゴスやパトスの真理が、ファウストという一個の最高の人間の類型者の生

涯によって、象徴的に刻みあげられている。したがってわれわれは「ファウスト」の全曲に、人間の喜びや悲しみが深刻に描かれ、人類の過誤や罪からの救いの福音が、教会の手法によらずに、人々の心に感動を誘う素晴らしい文学的タッチで、見事に告知されているのを見る。それはひとりドイツ人にだけではなく、全人類に献げられた世界的詩劇であった。恰もベートーヴェンの「第九交響曲」のように、ハインケがゲーテの「ファウスト」を、天上の聖書である「新約聖書」に対して、「地上の聖書」(Die weltliche Bibel)と呼び、ゲーテ学者がこれを「新しい人間性の聖書」(Die Bibel der neuen Menschlichkeit)と言った所以はここにあるのである。

ゲーテの「ファウスト」は、このように人類にとって、永遠に常に新しい最高の価値をもつ古典である。それはゲーテが刻みあげたファウストの人間という一個の人間類型が、シェイクスピアのハムレットなどと共に、すべての民族を越えて、深く自覚的に生きようとする人間であれば、誰もが体験し、思索するであろう一切を、極めて多彩に象徴している、と考えられるがゆえに、ゲーテの「ファウスト」は、人類の歩みとともに不朽であるであらう。そこにはパトスとロゴスにおける人間性の真理と誤謬とが、辞典的な語彙をもって、鮮やかに描かれている。それは「人類の予言者」と呼ばれるような天才でなければ書きえないような、人間性の真理の文学的象徴である。

私は大学に入學してから、深く考えなければならぬアポリアに直面したときや、何かに苦悩しなければならなかったとき、必ず「新約聖書」を手にして、教会へ行くか、あるいはこのゲーテの「フ

「ファウスト」をポケットに入れて、御所の木立の中を歩き廻わった。それは「新約聖書」が、私の信仰を支配する最高の一冊の本であったのに対して、ゲーテの「ファウスト」は、聖書の真理を含みながら、私の未熟な思索や体験を深めてくれる最深の一冊の本であった。したがってゲーテの「ファウスト」は、私の自覚の深まりとともに深くなって、常に私の精神の遍歴から離れることのない唯一の本であった。しかしゲーテ「ファウスト」の難解さのゆえに、これを深く読むために、私は今まで随分多くの「ファウスト解説」や「ファウスト論」を買って読んできた。しかしなお「ファウスト」はその測り知れない深みを、私の前に見せてはくれない。

余り数多くない私の蔵書の中で、最も大きな全集は、コッタ記念版の「ゲーテ全集」(全四十一巻)であり、稀覯本と呼ばれるものも、すべて私が「志賀・ゲーテ文庫」と呼んで、その蒐集に苦勞をしている「ゲーテ書架」の中にある。この書棚をみた学外の訪問者は、私の専門がドイツ文学なのか、と尋ねるほどであるが、事実私の書齋にある洋書のうち、その三分の二がゲーテについてのものであり、さらにその三分の二が「ファウスト」に関する文献である。もし今後何かの出来事によって、私の蔵書の大部分を失うことがあっても、「新約聖書」のほかには、ゲーテの「ファウスト」さえ残れば、私は私の精神の揺ぎない支柱を失うことはあるまい。ゲーテの「ファウスト」は、私にとってこのような意味をもつ一冊の本であったのである。

(文学部教授・商高校長・教育哲学)

昭和39年度

同志社女子大学

(1) 募集学部

文学部 (英文学専攻・音楽専攻・家政学専攻)

(2) 願書受付期間

第一類 (書類審査) 12月16日ー1月31日
第二類筆 (答試験) 2月5日ー3月2日

(3) 入学試験日 (二類) 昭和39年3月9日・10日

試験場 同志社女子大学

(4) 入学試験科目

国語(甲)、英語、理科(物理、化学、生物、地学)

※理科については家政学専攻志望者は四科目中二科目、
英文学、音楽専攻志望者は一科目選択受験する。

※音楽専攻志望者は実技試験を行う。

入学案内 千とも90円(切手可)

京都市上京区今出川寺町西入ル

同志社女子大学教務課

外国の言葉

——「ドイツ気違い」の思い出——

滝川 春雄

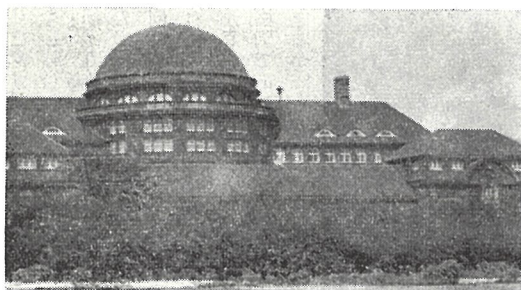
「ドイツ気違い」。この言葉は私にピッタリあてはまる。私の父が「ドイツ気違い」であつたので、私は小さいときからその影響を受けて一種の憧れと夢をドイツに対してもつていた。従つて、英語を習い始めた頃よりも年令的には大人になつていたが、ドイツ語を習い始めたときは何か一種の楽しさを以て勉強したものであつた。強い、噛みつくような発声音がいつも私の耳に快くひびいたものである。

いよいよ文部省の在外研究員として留学でくることになつたとき、私の行先は当然ドイツであつた。昨年五月十六日、三十八日の船旅の後ハンブルグの港に上陸して以来、約一年間の私のドイツの生活が始まる。「ドイツ気違い」が憧れのドイツで生活できることはどうれしいことはない。留学中ドイツ各地や各地の大学、スカンジナビア、フランス、イタリア、スイス、オーストリー、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグなどを旅行したは



ハンブルグ市街

か、私は殆んど全期間をハンブルグ大学（ヘンケル教授、ジーバート教授―総長）で過ごし、その間二度ケルン大学（エーラー教授）を訪れて数日を過ごした。これは「ドイツ気違い」が言葉で悩まされ、言葉で喜びを覚えた思出話である。



ハンブルグ大学

一にセンス・二に物真似

言葉というものは微妙である。調子の上げ下げによって、疑問形から感情の表現に至るまで、実に芸がこまかくできている。同じ日本でもその言葉が地方によって随分違う。鹿児島は同じ日本語でも非常に変わっているが、電話で「モシモシ」というところを「コラコラ」と言われてびっくりしたことがある。これが外国語となると全く質が違うのであるから、

何とか意志が通ずるように話すことは、比較的困難である。外国でよくノイローゼになつて帰国を余儀なくされる人が可成り

あると聞くと、いろいろ原因はあるにしろ、大部分は言葉で参つてしまふということをある外国通が私に話してくれた。

私はハンブルグに着くとすぐ中央駅の案内所（ホテルや部屋の）へいった。ホテルと下宿の丁度中間に当るパンジオン Pension の斡旋をしてもらうためである。パンジオンには随分立派なのから相当古ぼけたのまでいろいろある。案内所で日本人の沢山入っているパンジオンがいいかと尋ねられたので、日本人の一人もいないところがいいと答えたら、電話をしてくれて紙片に住所を書いてくれた。タクシーをつかまえてこの紙片を見せてゆきついたところが、一年間厄介になったパンジョンコルニスである。大学の法学部の筋向いにあるこのパンジョンは、高さの平均して建ちならんでいる四階建の建物の一階である。玄関へ出てきたコルニス夫人は六十二、三才のよく肥つた、見るからに意志の強そうなドイツ婦人であつた。眼鏡の奥に光る目が鋭く私をみつめるので、何か意地の悪さうな印象を最初受けた。彼女のドイツ語はホッホドイツチュで、非常に歯切れがいいが、スピードの早いことは驚くべきほどであつ

た。ドイツ人の言葉はまるで速射砲みたいだと父がよく話してくれたが、この夫人が喋るのは全く速射砲そのものであつた。いよいよ今日からこの速射砲に対抗してゆかねばならないと思うと、さすが呑気者の私も一寸ユウツになつたし、また身の引しまるのを覚えた。この夫人の話では、八年ほど前にナカジマという日本人がこのパンジョンにきたことがあるが、後に先にも日本人と話したのはこのだけ人だということであつた。従つて彼女は日本語はもちろんのこと英語も話せない。毎日彼女と顔を合せるたびに話す言葉はドイツ語以外にないということは、望むところであつたけれども、物凄いスピードのドイツ語をあびせられてはさすがに気が重かつた。

慣れないときに速射砲のようなドイツ語で話されると、それが一本の棒のように聞こえる。切れ目を感じないのだから分る筈がない。最初の一週間くらいは朝食を運んでくるこの夫人に何を話そうかと一生懸命ドイツ語の作文を作つて用意したものであつた。というよりもなるべく夫人と話す機会を少なくしようと思つたし、大学へ行つてもなるべく学



ハンブルグの市電

生と話す機会を避ける気持があった。これは、もし話しかけられた場合によく分らないという心配があるためである。事実コルニルス夫人の棒のように聞こえる言葉に対して、私が何度も聞きかえすと、「プロフェッサー、これだけいつてもまだ理解できないか」と彼女が私にいう。このときの情なき、口惜しさは格別である。ドイツ人はよく「挨拶くらいできるか」というが、私も早く挨拶くらいでき

るようになりたいと思った。早く日本に帰りたいと本気で考えたのはこの頃である。しかしここで憶することなく頑張り通すと、十日、二週間、三週間、四週間、一ヵ月と経ってゆくうちに、不思議に一本の棒がちゃんと切れて耳に入ってくるようになる。ここまでするところからもそう慌てて応対しないで済むようになる。こうなると人間というものは勝手なもので、私の方から夫人の部屋へ出かけて話込みにいたり、大学でも学生にこちらから話しかけてゆくようになる。何とかして一日でも長くドイツにいたいと考え出すのはこの頃である。日本を出発する前に、私の研究室の連中からこんなことをいわれた。「外国語がうまくなる人は第一にセンスのあること、第二に物真似がうまくいこと、第三に羞恥心のないこと。先生心配いりませんね」といって彼等はニヤニヤ笑っていた。私は自分でセンスがあるとは思っていないが、比較物的真似はうまいし、余り人見知りをしない。彼等もこの点をひやかしたと思う。私は決してドイツ語がうまくなったとは思わないが、私のドイツの生活がこの上なく楽しく、別に何も不自由しなかったのは研究室の連中のひや

かしがある程度当たっていたのだと思う。外国にゆく人から、言葉は困らなかつたかとよく聞かれる。こんなときに私は、誰だつてはじめはつらいが、最初のつらさを憶することなくどこまでも突進して克服すべきだと答える。全然言葉の違う世界へ入っていった、何の苦勞もなく自由に話をしようと思うこと自体考え方が甘すぎると思う。つらいのがあたり前である。

Hier ist kein Ausgang.

言葉が少し慣れてくると茶目つ氣もでて、なかなか生活が面白くなる。親友のO君などしばしばドイツ人をひやかしていた。ある日の夕方ラッシュアワーに市電に乗るとき話である。ハンブルグの市電は赤い色で実に美しいが、普通二輛連結で走っている。一輛に乗降口が三つあり、入口 Eingang は一番後部だけで、真中と前のは出口 Ausgang 専用である。一番後部の入口の上にはわざわざ大きく「出口ではな」 Kein Ausgang と書いてある。市電はいつも空いているが、ラッシュアワーのときだけ相当混む。入口が一つだからこういうときは入口に人が一杯つま

て不便である。満員電車に片足かけて申へ入ろうとしたが一杯でなかなかうまく入れない。車掌は「扉が閉まらないから下りてくれ」という。こちらはいれてくれと頑張る。しほいに車掌が業を煮やして怒鳴る。このとき「こは出口ではない」とこちらが怒鳴り返すと、乗客が大笑いして拍手喝采して乗せてくれるという寸法である。

ハンブルグへ着いて間もなく「中央駅」へゆくのにはSバーン（国電）に乗るため出札口で切符を買おうとしたが、何度も聞きかえされる。Hauptbahnhof——ハウプトバーンホフ——と正確にいったつもりだがうまく通じない。腹が立ったがドイツ人の言い方と違うらしい。翌日切符を買うとき前に並んでいたお嬢さんのいうのを聞いていて、これを真似たら以後くわえタバコのままで通ずるようになった。彼等のいうのは「ハップバーンノフ」と聞こえたのであった。

これもドイツへ着いて二ヵ月ほど経ったときの話である。ある朝コルニス夫人に電話だといって叩き起された。航空会社からの電話であった。電話口から婦人の声で英語が聞こえてきた。「英語を話すか」というのであ

る。腹が立ったので「英語は話せない」とドイツ語で答えたところ、物凄いスピードの速射砲をあびせかけられた。ねぼけている上にこう早くては手がつけれない。勝手に喋らせておいて一段落したとき「Bitte!」と叫びてやったら、相手も大分くさったらしく、ため息をついてゆっくり話し出したのでどうにか話を通じた次第であった。余り調子に乗ってドイツ人の真似をして早口で喋ると、相手も手がげんをしてくれないから飛んでもない目にあうことがある。

五百リラのプレス代

イタリアを旅行したときの話である。ローマの遊覧バスに乗ったとき、ガイドの説明の言葉はドイツ語と注文したら私一人であったので、同行のO教授もドイツ語組に入ってしまった。英語組はまるで修学旅行のように大勢で説明を聞いていたが、われわれはまるで個人教授のように別のガイドからゆっくり説明を聞き、おまけに買物の手伝いまでもしてもらった。続いてナポリ——カプリ——ソレント——アマルフィ——ボムペイを廻る旅行に出たが、このときは殆んどアメリカ人ばかり

だったので、大勢に順応しておとなしく英語で説明を聞いていた。ところがこの旅行のマネジャーであるイタリア婦人が、カプリ島のホテルでビールを飲いているとき私に突然ドイツ語で「ドイツ語を話すか」と話しかけてきた。「もちろん話す」と大きく出たら、ホテルにあづけたパスポートをみたのであろうか、私やO教授の職業も知っていてひどく尊敬してくれた。自分もドイツに住んでいたことがあるのでドイツ語の方が英語より話しいいといって、そのとき以後の案内は英語の後で必ずドイツ語で説明してくれた。そして必ず「プロフェッサー、分りましたか」と聞いてくれるので、アメリカ人達は妙な顔をしていたが、私は大いにうれしかった。ヴェニスへ一人で出かけたときもホテルの支配人が流暢なドイツ語で応対してくれたが、ホテルはアメリカ人の観光客で一杯であった。アメリカ人達は陽気だが、中には行儀のよくない厚顔なものもある。するとその支配人が私に「彼等はお金持だが自分の国の言葉だけしか喋れない。いい気であるが余り好きになれない。貴方と私とで悪口をいっていても何も分らないのだから情ないものだ」という意味のこと

をいって、すぐ横にいる彼等を目で指しながら笑っていた。英語は現在世界語になっているのであろうけれど、ヨーロッパの郵便局などで「キャン ユー スピーク イングリッシュ」と怒鳴っているアメリカ婦人を見かけると、私のような「ドイツ気違い」にとつてこの支配人の言葉は痛快であつた。しかしローマのホテルで女中さんにズボンのプレスを頼もうとしたときは、イタリア語だけしか通じないので弱つたことがあつた。それでも辞書と首つ引きでどうにか意志が通じたので、O教授からひどく感心してもらつた。うれしかったのでその女中さんに二〇〇リラのチップをはずんだ。ところがホテルで支払いをするとき費目不明の三〇〇リラが計上されているので問いただしたところ、これはプレス代だという。プレス代をとられるならチップをやる必要はなかつたわけである。O教授が腹をかかえて笑い出し、「イタリア語が通ずるといばつていたら、プレス代に五〇〇リラもとられたじゃないか」と旅行の終るまでひやかされたものであつた。

言葉で苦勞をし、言葉で失敗もして、一年間私はドイツ人の中で鍛え抜かれたが、こ

することによつて私のドイツ生活は本当に楽しかつたし、ドイツの生活にある程度とけ込めたのであつた。ヨーロッパではしばしばフトハンザ(ドイツ)やスイスエア(スイス)を利用したが、必ずといっていいほどスチュワーデスは日本人に対して英語で話しかけてきた。私はいつも笑いながらドイツ語で答えると、彼女達は私の座席の横へ入り込んで、「日本人だのにどうしてドイツ語を話すのか」といって、「ドイツ語で話してくれるのはうれしい」とつけ加えることがよくあつた。あるとき余り何べんも「何故ドイツ語を話すのか」と聞くので、「私の妻は半分ドイツ人(混血)だ」と答えたら、「それでよく分つた」といってニコニコしていた。このことを家内に話したら、「バカバカしい。いいかげんなことばかりいって」と一笑に付された。誰しも自分の国で自分の国語を外国人が一生懸命話すことに悪い気はしない筈である。外国生活を愉快にし、意義あらしめる第一歩は言葉の訓練のみにかかつている。

(昭一八・大法律・阪大教授)

同志社中学校

募集人員 300名・共学

受付期間 2月3日(月)～2月22日(土)

試験日 3月1日(日)～4日(水)

試験科目 面接および試問については願

書受付の際お知らせします

同志社高等学校

募集人員 150名・共学

受付期間 1月13日(月)～2月21日(金)

試験日 2月24日(月)・25日(火)

試験科目 第1日 国語・社会・理科・

面接

第2日 数学・英語・面接